

---

# ずっと一緒に

L E E

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
ずつと一緒に

【Nコード】  
N9014D

【作者名】  
LEE

【あらすじ】  
おれたちは組織を倒し、全ては終わったはずだった。新×志デス。

はじまり

「シエリー。お前は幸せにはなれない。姉や両親のようにな・・・」

―パシユッ―

追い詰めたジンは、自決した。私たちの目の前で。

涙が           あふれてくる

私は・・・悲しいの？嬉しいの？

わからないけど   涙はあとからあとからあふれてきて。とま  
らなくて。

「全て・・・終わったんだ・・・」

私の隣で工藤君がつぶやいた。

そう、全て終わったはずだった

## はじまり（後書き）

はじめまして！ぞうのはなです。

初の小説投稿です。

未熟者なのでおかしな点がたくさんあると思いますが  
温かい目で見守っててやって下さい（汗）  
感動物にできたらな〜と、思っています。

## 第二話

組織を倒してから数週間後。

データがそろつと解毒剤は、すぐに完成した。

オレ、江戸川コナンは解毒剤を飲み、元の姿に戻った。

検査の結果、オレの体に異常は見られないらしく、完全に元の姿に戻ることができた。

「なあ、灰原はいつ戻るんだ？」

ここは阿笠邸の地下室。

オレの目の前にいる少女が答える。

「今、迷つてるのよ。」

迷つてる・・・？どういうことだと、オレは首をかしげた。

「宮野志保には・・・なにものこつてないから。」

ああ、そうか・・・と、オレは今頃気づく。

灰原哀のままだつたら、どんなに楽しいだろう。

帰る場所もあつて、一緒に住む人もいて、友達もいて・・・

でも・・・宮野志保は・・・ひとりぼっち・・・

ほんとうにひとりぼっち・・・？

「なあ、灰原」

「なに？」

「運命から逃げるな」

前にも同じこといったよな？

「確かに灰原哀のままだったら楽しいかもしれないけど」

「————」

「宮野志保はオメーだけだろ？」

「宮野明美の妹は、宮野志保だ」

「な。」

そういつて彼はニカツと笑った

どうしてこんなに・・・こんなに・・・

—あなたの笑顔を見るとこんなに安心するの—



## 第二話（後書き）

どうも。ぞうのはなです。

私の小説、意味わかんないかも（汗）

### 第三話

彼の笑顔を見るとほっとする。

頼もしくて、彼がいれば絶対大丈夫って。そんな気がしてくる。

「フツ。そうね。私ももどに帰るわ。逃げるのは性にあってないし。」

「そうそう。灰原はそうでなくちゃな」

^

^

^

「なあ博士。灰原まだかな。」

「うん・・・おそいの」

灰原が解毒剤を飲んでから二時間。灰原は、まだ地下室にいる。

ちょっと遅いんじゃないか？

—ガチャツ—

「おまたせ」

透き通るような白い肌

何もかも見透かしたような大きな瞳

ウェーブのかかった赤みがかった茶髪

すらりとした手足

きれいだ　すごく

「工藤君？」

「あ！？ああ・・・」

「どうしたの？黙り込んでるじゃって。」

「な、なんでもねーよ」

「そう」

オレ、顔赤くなってねーかな・・・ヤベ・・・

ドキドキする・・・

「哀君・・・」

博士は泣きそうだ。

「もう、灰原哀じゃないわよ」

「ああ。そうじゃな、志保君。」

「そーいやーおめー、ほんとに18歳だったんだな。」

「84歳だと思ってた？」

そういつて彼女はいつもの様にクスッと笑った

姿が変わっても、こいつはこいつだな

### 第三話（後書き）

どーも。ぞうのはなです。

小説書くのってむずかしいですね。

次は蘭ちゃんのお話です。

## 第四話

「はあ」

「どうしたの？ 蘭。 あゝ！ わかったあゝ ダンナのこと考えてたでしよゝ。」

「ち、ちがうわよゝ 誰が新一なんかのこと・・・！」

園子はいつも私をからかってくる。

「私、新一君なんて、一ことも言っていないわよあゝ？」

ほら、また。

でも、新一のことを考えてたのはあたってる。

このごろメールくれないし。

コナン君も外国の両親のところに帰っちゃったし。

なんか寂しくなつたな。

新一、何してるんだろう。

どこにいるんだろう。

どうして教えてくれないの？

こんなに心配してるのに・・・

もう、待ってるのつらいよ

早く帰ってきてよ・・・

「・・・ん・・・」

「ら・・・ん」

「蘭!？」

「わっ!び、びっくりした・・・!」

「もー!何回も呼んだでしょ?」

「ご、ごめん。聞いてなかった・・・で、何のはなしだったか・・・?」

「ったく・・・蘭、このごろへんよ?ぼーっとしてるといつか・・・」

「はは・・・なんかこのごろいそがしくって・・・」

~~~~~  
~~~~~

「ただいま。」

「ああ、おかえり、蘭。」

「すぐ、夕飯作るね・・・」

「お、おお。」

コナンがいなくなってから、蘭の元気がなくなったように見える。

探偵ボウズもないのに、コナンまでいなくなっちゃったから

蘭は今、すげー寂しいだろう。

オレが蘭をはげましたって、たぶん元気にならねー。

蘭が今求めているのは、あの、探偵ボウズだから。

情けねーな。親なのに娘のために、なにもしてやれねー。

親なのに……。



#### 第四話（後書き）

どーも。ぞうのはなです。

蘭ちゃんの切なさがつまく書けてない・・・（汗）

待ってるだけって絶対つらいですよね。

## 第五話

新一・・・

会いたくて会いたくて、新一の家の前まで来てしまった。  
いるわけ、ないのに・・・

「ら・・・ん？」

なつかしい、あの、優しい声

ふり向くとそこには・・・

新一が立っていた

夢じゃ、ないよね・・・？

新一だよね・・・？

「新一い・・・！いつ帰ってきたのよお・・・！！  
どこに・・・どこに行ってたのよお・・・！！！！！！」

涙が止まらない。どんどんあふれてくる。

「蘭。待たせて・・・ごめん。」

「！」

「ごめんなって・・・どれだけ心配したと思ってるの・・・」

ずっと、ずっとまっていたの・・・？

「工藤君！わすれもの・・・！これ・・・」

だれ？

阿笠邸から出てきた、知らない女の人

すごく、きれいな

「ごめんなさい。邪魔しちゃったみたいね・・・」

「あ・・・いや・・・べつに・・・」

「ごめんごめん。わすれてた～はは」

「ちょ、ちょっと！新一！このひと・・・」

「あ～えっとお、知り合いというかその・・・」

「宮野志保です。よろしく。」

「あ、あの・・・新一とは・・・」

「ああ、事件を依頼してたの。」

「そ、そうなんですか・・・」

見ていて思う

このふたりは

依頼人と探偵なんかじゃなくて

もっと

もっと

—深い関係がある—

## 第六話

コナン君、哀ちゃん、なんで居なくなっちゃったの・・・？

歩美、二人のこと、大好きだったんだよ・・・？

なのに突然・・・

「どうしたの？」

哀ちゃん・・・？

「何がそんなに悲しいの・・・？」

いつも優しい、哀ちゃんとおんなじ声だ・・・

でもそこに居たのは・・・哀ちゃんじゃなくて・・・

すごくきれいなおねえさん

「大好きな人がね・・・遠くに行っちゃったの・・・」

会いたいの・・・

「そつか。でもさ・・・そのひと、あなたが悲しむの、きつと望んでないわよ。」

そうだけど・・・そうだけどさ・・・

「死んじやつたわけじゃないんだから・・・またあえるよ・

・・・」

そういったおねえさんの声は

すごく悲しそうで・・・っらそつで・・・

「ね。」

うん。また会えるよね。

「ねえ、おねえさん、歩美と会ったことない・・・？」

「ああね。どっかしら。」

きっと、はじめましてじゃないよね

## 第七話

くくくくくくく

「あ、メールだわ。工藤君からね・・・」

組織の残党が動き出したらしい。

危険だから、かえって来い。

うそ・・・うそよね・・・？

終わったと思ってたのに・・・もう、どこにも逃げる必要はな  
いって

思ってたのに・・・

帰らなくちゃ・・・

「よう、シェリー。」

え？

上から下まで真っ黒な男

私は走り出した・・・が・・・

ーガシッー

「きゃっ」

男に腕をつかまれてしまった・・・！

「んんー!!」

私は口をふさがれ、車に乗せられた。

~~~~~  
~~~~~

「くっそー!何で宮野のやつ帰ってこねーんだよ!」

「し、志保君・・・」

まさかあいつ・・・もう・・・!!

「博士！オレ、宮野探してくる・・・！」

「あ、おい新一！！命を狙われてるのはお前も一緒なんじゃぞ・  
・！！！」

「あいつはオレが守るって約束したんだ・・・！！！」

ボタン・・・！！

「新一・・・。」

何でオレ、こんなに必死なんだ？

そりゃあ、人の命が狙われてるんだ、普通必死にもなる

だけど

今のオレには、冷静さがまったくない

こんなの、たぶん初めてだ

今まで、絶体絶命なときも 少しは冷静さがあつたはずだ

あいつがいなくなったら

あいつがいなくなっちまったら

オレは

生きていけない

あいつを失ったら

生きている意味がない

オレは宮野のことが

好きなんだ



## 第八話

．．．宮野．．．

．．．宮野．．．

．．．宮野．．．

どこに  
いるんだよ．．．！？

――工藤君――

あいつの  
声が聞きたい

あいつの  
笑顔が見たい

あいつに  
触れたい

あいつの  
ソバにいたい

あいつを守りたい

~~~~~  
~~~~~

「私をどうする気・・・?」

「そおんなことあー、言わなくてもわかるだろ」

がはははは・・・!と笑う男達。

私は、殺されてしまうのだろうか

もう、博士にも、子供達にも、

・・・工藤君にも・・・あえないの・・・?

「何野お・・・!?!?!」

・・・  
うそ・・・

「確保お!!!」

一斉に警察が駆けつけてきた

「宮野っ・・・!」

「・・・っ・・・!?!」

私は・・・工藤君に・・・抱きしめられてる・・・?

あたたかい、彼のからだ

背中にまわされた手だけは、冷たくひえている

「・・・っ・・・はっ・・・はなして・・・!!!!!!」

私は彼をつきとばした

「って!なにすんだよ」

「あ、あなたこそ、なによいきなり・・・！」

「あ・・・わ、わりい・・・」

なにやってんだ、オレ。

そりゃあいきなり抱きしめたらびっくりするよな・・・

「あのさ・・・宮野・・・」

「オレ・・・」

「な、なによ・・・？」

真剣な、彼の目

る。

見つめられると、金縛りにあったように、動けなくな

「宮野のこと、好きだ」

なに・・・いつてゐの・・・？





## 第九話

「・・・へ、変な嘘をつくのはやめて・・・!」

「うそじゃねーよ・・・」

「嘘よ!!・・・だって・・・だって・・・」

だってあなたが好きなのは

いつも明るくて

太陽みたいな

彼女

私と正反対な 天使

あなたと彼女が一緒に笑っていてくれれば

私は苦しまなくてすむ

みんなが笑ってられる

みんなが幸せ

「あなたには、素敵な幼馴染がいるじゃない。  
私をからかっているの……?」

「からかってなんかいいー!!!!」

彼が……本気で怒鳴った

「中途半端な気持ちじゃねーよ……」

「なんでわかってくれねーんだよ・・・」

「あなたは私を恨んでればいい・・・！」

私は幸せになる権利がない・・・！」

「なんでわかんねーんだよ！幸せになる権利があるのかな  
いとか・・・！」

いつまで殻に閉じこもってんだよ・・・！！」

私はその場から逃げ出した

私は、幸せになつてはいけない

## 第十話

走って、走って、走って

私は暗い路地裏についた

「・・・さむい・・・」

雨が少し降ってきた

ここは、どこだろう

あてもなく走ってきたから

ここがどこか、まったくわからない

私はその場にすわりこんだ

—宮野—

工藤君の声が 遠くで聞こえたようなきがした

どうして、彼はあんなこと言ったのだろう

彼の声を聞きたびに

どんどん惹かれていつて

彼の笑顔を見るたびに

どんどん好きになってゆく

好きになつてはいけないのに

彼の運命を狂わせたのは私なのに

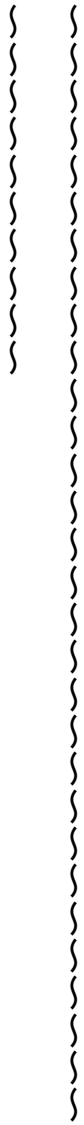
優しくしないでよ

もっと好きになっちゃうじゃない

憎んでよ 恨んでよ

あんなに彼女のこと想ってたじゃない

目を覚ましてよ



「み．．．や．．．」

だれ．．？

「みや．．．の．．．」

「宮野」

工藤君．．．？

「目えさましたか、ねーちゃん！」

「は、服部君．．．」

「心配したんやで〜。とくに工藤が」

そう言うって服部君はニヤリとしながら工藤君を指差した。

「うるせーよ服部……！オメー、昨日路地裏で気絶してたんだぞ。」

ああそうか……昨日あのまま路地裏で……

「ったく、心配させやがって。」

「あら、べつに心配してくれなくてもいいのよ。」

「あ、あのな」

ここは……いつも寝ているベッドの上。

いつもの景色。

「あ、そうや〜！オレ、ね〜ちゃんに話があるンやった  
」！

「え？……私……？」

「そ。わりいけど工藤、席はずしてくれへんか？」

「あ、おう。」

そういつて工藤君は部屋から出て行った

「で。私に話って？」

私はベットから出ようとした。

「あ．．そのままでええよ」

「さ、お話をどうぞ？」

あまり話したことの無い彼が、私に話とはなんだ  
ろう。

「単刀直入に言うけどなあ．．．」

くくくくくくく

「す、スマン・・・携帯なつてもた・・・ちよつと  
まっててな・・・」

和葉からや・・・」

—ピッ—

「平次いゝ！！今どこにいるン？！」

「あゝ東京やゝ。」

「はあ？！と、東京つて・・・どういつつもりや！  
約束すっぱかしてえ！！」

「あゝ、スマン。今、大事な話してんのや。じゃあ  
なゝ。」

「ちよ、ちよつと・・・！平次い！？」

—ピッ—

「ふう。」

「遠山さん・・・かわいそうね・・・そんなに大事な話なの？」

「むっちゃくちゃ大事な話や！」

「そう。で？」

「ねえちゃん、工藤のことどう思ってるんや？」

「どうって・・・？」

「工藤は本気や・・・！」

「あなたまで私をからかっているの？」

「からかってなんかない!!！」

「工藤君には・・・！幸せになってほしいの！」

なんでや？

何で自分の気持ちごまかしてるんや？

おれにはさっぱりわからん

## 第十一話

「あなた達を・・・巻き込みたくないの」

幸せに暮らしてほしいの

「私にかかわらないでほしいの」

どうしてそれをわかってくれないの・・・！？

「じゃあ、工藤を幸せにするのはだれや？」

「毛利さんに決まってるじゃない」

そう、あの二人はお似合い

「それは・・・無理や・・・」

「だって工藤の幸せは・・・あんたと一緒に生きていくこと  
なんやから」

うそ、そんなはずはない

「いつまで殻に閉じこもってるつもりや……!」

閉じこもってなんかいない

「なんで素直にならん……?」

だって……私が素直になったら……みんなが幸せ  
になれない……

「なんで自分以外の人の幸せが優先なんや……」

ねえちゃんは、優しすぎるんよ……

自分の気持ち押し殺して

他人のためにつくす

優しすぎる性格

でもその優しさは 不器用だから

気づくヤツは少ない

工藤はその優しさに ちゃんと気付いた

工藤ならねえちゃんを幸せにできる

オレにはわかる

素直になれば・・・幸せになれるのに・・・

ほんま、馬鹿やなあ。ねえちゃん。

「ねえちゃんが不幸でいるのを、誰が望むんや」

「不幸になって、罪を償ってるつもりか・・・!？」

「だれかを不幸にしたんなら・・・だれかを幸せにせんといかん・・・!」

でなきや罪は償えない

「償うつちゅーのはそーいうことやろ？」

「人間なんやから、幸せをもとめつつたつてもええんや」

ええんよ

一人で抱え込無必要はこれっぽっちもないんやから

ずっと一緒に歩んでいけるやつが

ねえちゃんには必要や

工藤・・・このねえちゃん・・・

絶対幸せにしてやらなあかん・・・！

~~~~~  
~~~~~

「おい。服部い。話し終わったか？」

工藤君が部屋にはいつてきた

「おおー！ばっちりやー！」

そういつて服部君はガッツポーズ・・・

めでたい人ね・・・

―幸せを求めてもええんよ―

彼の言葉が頭の中でこだましている・・・

本当に・・・いいの・・・？

「なあ。宮野もいくよな!？」

「えっ・・・なにに・・・？」

「おいおい。聞いてなかったのかよ・・・」

「ごめんなさい。考え事してたの・・・で、何に行くって?」

「花見や、花見!毛利のねえちゃんらも誘って!」

「へえ。いいじゃない。」

「じゃあ決定だな」



## 第十一話（後書き）

関西弁、書けません（汗）

## 第十二話

～毛利探偵事務所～

「え！お花見！？」

「あら～！新一君もたまにはいいこと思いつくじゃない！」

たまにはとはなんだ園子（怒）

「で？誰誘うのよ」

「あ～。とりあえず・・・服部たちと、子供達と・・・博士と宮野だな。」

「宮野？」

園子は「だれ？」という顔をしている。

ああ、園子に言っていないけな。

「宮野っていうのはえ～っと・・・オレの依頼人だよ。」

「なんで依頼人よぶのよ。しかも呼び捨てだし・・・ねえ、蘭。」

「そ、そういえば・・・」

やっべえ~~~~~!!

どうすりゃいいんだ!?

「そういえば・・・気づいたけど・・・宮野さんって、哀ちゃんに似てたような・・・?」

さらにやべ~~~~~!!

「えっ・・・蘭あったことあるの?その人に・・・」

「うん。新一の家の前で。」

「え・・・それはだなあ・・・」

ーピコーンー

あ、今はオレの頭の中の音だから。

そうか・・・そうすればいいんだ・・・！

ひつらめいた」

「あ、あの・・・宮野は・・・灰原哀って子の姉なんだよ！

そ、そっくりだろ・・・ははは・・・」

「なるほど！哀ちゃんのお姉さんって事は、新一の親戚つてことね！」

「そ、そうなんだよ」

ふゝ。なんとかなったな・・・。

~~~~~  
~~~~~

「で、私が灰原哀の姉っていうことになったのね。」

「あの場を切り抜けるためにはそうするしかなかったんだよ・・・」

オレは今、博士ん家でランチタイム中

宮野の作ったサンドイッチを食ってる。

「にしても、楽しみじゃのお・・・お花見・・・」

そう言いながら博士もサンドイッチをむしゃむしゃ・・・  
って

「博士！サンドイッチそれで何個目食ってんだよー！」

「いやぁ・・・おいしかったものでつい・・・」

食いすぎだっつーのー！！！！

「それより新一。蘭君には組織のことなにも話していないよ  
うじゃが・・・」

「ああ、いつか話すよ・・・」

「いつかって・・・」

「彼女に秘密にしているの？」

「秘密ってなに？新一。」

ら、蘭！……！！

ふりむくとそこには蘭が立っていた

「ら、蘭……！！いつからそこに……！！？」

「ねえ。質問に答えて……新一……！！」

「なんで……？新一……前は何でも私に話してくれたのに・  
」！」

蘭……泣いてるのか……？

蘭を泣かせてるのは……オレだ……

オレ、最悪だな。

ずっと蘭を待たせといて、何も話さないなんて・・・

「わかった。全部、話すよ。」

蘭に全てを話した。

組織のこと、体が縮んだこと、宮野のこと。

「どうして？」

「・・・」

「どうしてあんなに近くにいたのに・・・！なんにも・・・

何も言ってくれなかったの・・・！？」

「それは、あなたを危険な目にあわせないようにする  
ためよ」

宮野がいった。蘭の目を真っ直ぐ見て。

蘭はうつむいた。

「工藤君はあなたのことを一番に考えていたのよ。」

宮野がそう言い終えるのと同時に、蘭が顔をあげた。

「だいたい・・・！あなたがそのAPTX4869って薬作ったからこんなことに

なったんじゃない！！あなたにそんなこと言われたくない！！！！」

オレが一番怖かった言葉

聞いたらたぶん

アイツは傷付いてどこかに消えてしまう

だってアイツは

薬を作ったことに

ものすごく後悔しているから

ものすごく罪悪感を感じているから

だれよりも優しいから。

—バアンツ—

「宮野!」

やっぱり。思ったとおり。

アイツは出て行った。



## 第十三話

―バアンッ―

宮野がドアを閉めた音が 部屋にこだましている

「志保君！」

「博士！オレが連れ戻してくるから待ってる！」

オレはそういうと、玄関に走った。

「待って新一！」

「な、なんだよ！？」

蘭が俺の腕を掴んだ。強く、強く。

「悪いのはあの人でしょ！？一番つらいのは私よ！……！」

「るっせー！！！！！」

新一・・・？

「はなしてくれ。蘭。」

そういつてオレは蘭の腕を振りはらい、走り出した。

公園、駅、学校・・・アイツの行きそうな所は全て周った。

「宮野お！！！」

大声で何度も、何度もよんだ。

でも、あいつの声はきこえなくて。

それでも、何度も呼んだ。

ふと、川ぞいのベンチに座っている女性がみえた。

「みや……の……？」

顔を上げた彼女は

美しかった

夕日に照らされて

彼女の赤みがかった茶髪は 金色に輝いている

いつも潤みをおびている瞳は キラキラと光を宿している

「工藤君」

彼女に名前を呼ばれる

もう、我慢できない

オレは、彼女を抱きしめた

もう、どこにも行かないように

強く・・・強く・・・

「もう、逃がさねーぞ・・・!」

もう、だめだ。

あなたが、そんなに優しい声で囁くから

「もう一度言っぞ。」

あなたに見つめられると

動けなくなる

「お前のこと、愛してる。」

気のないふりをしていても

ずっと言っ<sup>て</sup>ほしかった言葉

「私も……」

唇から、つたわってくる 熱。

キミの瞳から 雫が 流れ落ちた

僕はキミと

私はあなたと

ずっと一緒に生きていく



## 最終話

—蘭—

新一。しんいち。シンイチ。

居なくなる前は、いつも私が一番新一のことを知ってた。

一番新一の近くに居た。

なのに・・・なのに・・・

今はすごく遠くへ行っちゃったような気がする。

宮野さん

さつきあんなこと言っちゃったけど

博士から全部聞いたよ

組織に無理やり薬を作らされていた事

いっ両親の事

・・・お姉さんのこと・・・

よく考えてみたら私、新一に

好きだ　とか

愛してる　とか

プロポーズされた事なんてないじゃない

なんてひどい事を言ってしまったんだろう。

何も知らずに。

ホント、最悪ね・・・私・・・。

新一。

大好きだったよ。

すごく大好きだったんだからね・・・！

彼女を絶対幸せにしてあげなさいよ

~~~~~  
~~~~~

「いや〜！あの子にこんなに美しいお姉様がいたとは！

それにしても妹さんにそっくりですな〜!」

桜が満開の公園でお花見

おっちゃんは酒で酔いすぎだよ・・・

さつきから宮野を褒めまくってるし・・・

「ねえ、みんな!向こうで鬼ごっこでもしない?」

「やるやる!」

「も〜。蘭ってホント子供好きね〜。」

園子が飲んでいたウーロン茶を置いて、蘭と少年探偵団の所まで走っていった。

「よっしゃ〜!オレが鬼やつたるで〜!覚悟しとき!」

「あ・・・ちょっと待って〜よ、平次〜!」

園子の後に、服部と遠山さんがついて行った。

園子と遠山さんには、すごく責められた

蘭をあれだけ待たせておいて、どうしてほかの女なんだ。

ひどい、サイテーだ・・・と・・・。

確かに、待たせたのはオレだ

思わせぶりの態度をとったのも、オレ。

あのころは、たぶん・・・ホントに蘭の事が好きだった・・・  
でも・・・

いつのまにか

どんどん、どんどん・・・アイツを好きになってしまって

オレは宮野が・・・好きなんだ・・・

ホントにオレ、勝手な事言ってるけど・・・

愛する事は、やめられない・・・

好きで、好きで、しょうがないんだ

だから、許してくれ

・・・蘭・・・

薄いピンクの桜の花びらが、ひらひらと舞う中

オレはキミから・・・目が離せない。

やわらかい、キミの髪

やさしい、キミの香り

きれいな、君の瞳

ほんとに・・・ほんとに・・・大好きだよ・・・

「ずっと一緒にいよう・・・」

ずっとずっと、大好きだよ

## 最終話（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9014d/>

---

ずっと一緒に

2010年10月28日07時58分発行